

ヨハネによる福音書 6:1-13；「五つのパンと二匹の魚」——2026年6月21日

I. 歓迎と振り返り

- A. おはよう！おはようございます！今日ご出席のすべてのお父様方、父の日おめでとうございます。天の父を礼拝し、その栄光を称えるために、皆さんと共にここにいられることを嬉しく思う。神様が皆さん一人ひとりを祝福してくださるよう祈る。

1. 初めお越しの方や、オンラインで視聴されている方々を歓迎する。

- B. 学びを続ける前に、小学生のお子様たちを日曜学校へ送り出そう。

1. (第2礼拝：聖書英語クラスも同様)

- C. 子供たちが退室する間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第6章の箇所を開いてほしい。

- D. 今朝取り上げる聖書の箇所は、皆さんの多くが非常によくご存知のものだと思います。今日のテキストは、四つの福音書すべてに実際に記録されている数少ない出来事の一つを取り上げます。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの各福音書作家は、それぞれ独自の視点からこの特定の出来事を記し、異なる詳細を強調しています。

1. この出来事は、「栄光の入城」以前に、実際に四つの福音書すべてに記録されている唯一の出来事だ。「栄光の入城」から受難週の詳細に至るまで、記述が重複する部分は多いが、それ以前においては、今朝取り上げるこの箇所こそが、聖霊が各福音書の著者に記すよう導いた唯一の出来事である。

2. この事実を知ること、私たちはこの出来事がどれほど重要であるかを認識すべきであり、そこからできる限り多くを学びたいという興味が湧くことを願う。

- E. 今朝の聖書箇所はヨハネによる福音書第6章1節から13節であり、メッセージのタイトルは「五つのパンと二匹の魚」だ。

1. まだお気づきでない方もいらっしゃるかもしれませんが、今朝取り上げる出来事は、もちろん「五千人の給食」である。イエスが五つのパンと二匹の魚を用いて、数千人の人々を養うという驚くべき奇跡を起こされた出来事だ。

2. 皆さんも、もうヨハネによる福音書第6章を開いていることだろう。ここで、主とその御言葉を敬うために、皆さん全員に立ち上がっていただきたい。

3. 私はNKJV版の聖書から朗読する。別の訳を読んでいる場合でも構わない。私が自分の聖書から朗読する間、各自の聖書でできるだけ追いかけてほしい。

4. ヨハネは、5,000人を養った奇跡の詳細について、1節で次のように記している……（R & P）

II. はじめに

- A. 今朝の箇所は「これらのことの後」という言葉で始まっているが、その前に何が起きたかについての詳細はほとんど語られていない。

1. 先週の第5章では、イエスはエルサレムの城門のすぐ外にあるベテスダの池に定期的に集まっていた麻痺者を癒やした。

2. この癒やしは安息日に行われ、結果として宗教指導者たちの注目を集めることになった。

3. イエスはこの機会を利用して宗教指導者たちに立ち向かい、非常に大胆な主張を繰り広げた。そして、その主張を裏付けるために、それを証言できる数人の証人を次々と提示したのだ。

- B. もしヨハネの福音書を時系列に沿った連続した記述として読むならば、第6章の出来事は第5章の出来事の直後に起こったに違いないと考えさせられるだろう。何しろ、第6章は「これらのことのあと」という言葉で始まっており、ヨハネが直前に記したのは、麻痺した男の癒やしと、宗教指導者たちとの対決だったからだ。

1. しかし、他の福音書の記述を見ると、「その後」という言葉が、実際には数多くの異なる出来事が起こった一連の期間を指していることが分かる。

2. このテキストの後半で触れるように、この時点では全く異なる場所に移動している。第5章の出来事はエルサレムで起こったが、ここ第6章の出来事はガリラヤ地方で起こっている。

3. 第5章の終わりと第6章の始まりの間には、時系列的に多くの出来事が起こっている。

a. 福音書の並列比較や調和表を見れば、「その後」という一語の中に多くの出来事がまとめられていることが分かるだろう。

b. 「これらの出来事後」には、次のような出来事が含まれている。

i. イエスによる十二使徒の選任

ii. マタイによる福音書第5章から第7章に記された、イエスの有名な「山上の説教」

iii. 百人隊長の娘の癒やしから、ナインの未亡人の息子の復活に至るまで、様々な癒やしの出来事。ヤイロの娘の癒やしや、12年間も出血が続いていた女性の癒やしもあった。悪霊に取りつかれた人々の癒やしや、悪霊が豚の中に追い出された出来事。

iv. 弟子たちを二人一組で派遣し、福音を宣べ伝え、奉仕の働きを行わせた。人々が彼らのメッセージに信仰をもって応答したため、弟子たちはイエスが行ったのと同じような癒やしをいくつか行うことができた。

v. 洗礼者ヨハネは投獄され、その後、ヘロデ王によって斬首されることになる。

C. これらすべては、1節の「これらのことのあと」の間に起こった。

- C. 他の福音書の記述と照らし合わせて考察することで、イエスの地上の宣教の時代に何が起きていたのかについて、より完全で、深く、豊かな理解を得ることができる。

1. 各福音書の著者は、皆聖霊に導かれていたとはいえ、それぞれ異なる読者層を想定しており、聖霊が彼らに記録するよう導いた内容も異なっていたことが分かる。

2. 四つの福音書をすべて照らし合わせて初めて、キリストの生涯と宣教の全貌が明らかになるのだ。
そこで、五千人の給食として知られる出来事を取り巻くヨハネの記述を詳しく見ていくにあたり、ヨハネの記述からできる限り多くのことを汲み取りつつ、他の福音書記者たちがこの出来事について語っていることにも留意していく。
3. そうすることで、この出来事の全体像を捉え、神の御霊が今日、私たちに示し、教えたいと願っているすべてのことをそこから得ることができればと願っている。

D. それでは、冒頭の聖句をもう一度見てみよう。ヨハネは1〜3節で次のように記している。

III. ヨハネ6:1-3；

- A. さて、ここでもう一度ガリラヤ地方に戻ってきた。イエスは弟子たちと共にガリラヤ湖を渡り、大勢の群衆が彼らに従ったと記されている。
1. ヨハネの福音書には、この直前に何が起きたのか、そもそもなぜイエスと弟子たちが舟に乗ってガリラヤ湖を渡ろうとしたのかという経緯は記されていない。
- B. この直前に、他の福音書に記録されている二つの主要な出来事があった。
1. マタイによる福音書によれば、洗礼者ヨハネが斬首されたという知らせが、ちょうどイエスの耳に入っていた。洗礼者ヨハネはイエスが愛し、尊敬していた人物であったため、マタイはこの知らせを聞いた後、イエスが舟に乗ってガリラヤ湖を渡ろうとした理由の一つは、群衆から離れて人里離れた場所へ行くためだったと伝えている。（**マタイ14:13a**）
 2. イエスがこの知らせを聞いたのと同時に起きたもう一つの大きな出来事は、十二人の弟子たちが二人一組で派遣されていた宣教の旅から戻ってきたことだった。彼らは、イエスが洗礼者ヨハネの斬首の知らせを聞いたまさにその時に、イエスのもとに戻ってきたのだ。
 - a. 弟子たちは旅先で起きたことをすべてイエスに伝えようと大いに意気込んでいたが、イエスの注意を引こうと行き交う人々があまりにも多く、弟子たちの報告を聞くことさえほとんど不可能だった。（**マルコ6:30**）
 - b. そこでイエスは、ガリラヤ湖を渡って人里離れた場所へ行き、少し休むことを提案した。というのも、行き交う人々で忙殺されていたため、彼らは食事をする時間さえなかったからだ。（**マルコ6:31**）
- C. したがって、他の福音書の記述から、彼らがそもそもなぜガリラヤ湖を渡ろうとしたのかという理由がわかる。イエスと弟子たちは、切実に必要としていた静かな時間を過ごすために、人里離れた場所へ逃げようとしていたのだ。
1. 彼らは群衆から離れ、人里離れた場所へ逃げようとしていたのだ。そこで休息を取り、食事をし、証しを分かち合い、宣教の仲間を失った悲しみに浸るためだった。

2. 人生において、私たちも同じことをしなければならない時がある。一息つく必要があったり、タイムアウトを取ったり、ただ平和と静けさを求めてどこかへ逃げ出したり、あらゆる喧騒から離れ、気持ちをリセットし、集中し直し、休息をとる機会を自分に与える必要がある時だ。
3. イエスは休息の重要性を知っていた。弟子たちは、イエスに遣わされて旅から戻ったばかりだった。彼らは様々な宣教活動を行い、様々な人々と出会い、様々な出来事が起こり、人々が行き交い、忙しく動き回っていた。宣教は順調に進んでおり、その意味ではすべてが順調だった。
4. しかし、イエスは、弟子たちがイエスと二人きりで過ごせる場所へ離れ、休息をとる必要があると見ていた。
5. 私たちはしばしば、休息を特定の場所と結びつけてしまう。私自身もそうだ。
 - a. ファラと私には、どうしても必要な休息とリラックスのために訪れる場所がいくつかある。7フオールズでキャンプをするために山へ登ることもあれば、スオオシマのキャビンへ向かうこともあれば、単にキッコ公園を散歩することもある。そうした時間は、とてもリフレッシュできて有益なものだ。
6. イエスは休息の重要性を知っていたが、真の休息は場所から来るものではないことも知っていたし、理解していた。それは人から来るのだ。イエスから来るのだ。
 - a. イエスは、今日の聖書の箇所3節にあるように、ガリラヤ湖の岸辺から離れた山の人里離れた場所へ退き、弟子たちと共にそこに座られた。
 - b. イエスは、弟子たちに単に人里離れた場所へ行ってみて休息を見つけることだけを望んでいたのではない。イエスと共にその場所へ行き、休息を見つけることを望んでいたのだ。
 - c. マタイによる福音書11章28〜29節で、イエスはこう述べている。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう。わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。わたしは心優しく、へりくだっているから。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎが与えられる。」（**マタイ11:28-29**）
 - d. 真の安らぎは、イエスと共に過ごす時に訪れる。忙しいスケジュールの中から時間を割いてイエスと会うとき、私たちは求めている安らぎを見つけ、疲れ果てた魂が切望しているものを見出すのだ。
 - e. イエスは弟子たちに、日々の忙しさや奉仕から離れ、自分と過ごす時間を持ちたかったのだ。彼らがしていたことは良いことだったが、イエスと二人きりで過ごすことほど重要ではなかった。
 - f. 主に仕えることは重要だが、主と共に過ごす時間は不可欠だ。もしイエスと会い、主の中に安らぎを見出す時間を取らなければ、やがて燃え尽きて、疲れ果ててしまうだろう。
 - g. 主のために引き続き実りある働きをしたいのであれば、主と過ごす時間を人生の最優先事項にしなければならない。

h. 主に仕え、家族に仕え、教会に仕え、互いに仕えることに夢中になりすぎて、スケジュールから主と過ごす時間を割くことを怠ってはならない。

7. 主は私たちと会いたいと願っている。**主は、私たちが主の中で安らぎを見出すことを望んでいる。**
主は、主と静かな時間を過ごすために少し距離を置く必要性を、よく知っており、理解している。
私たちが、そうした時間を定期的にスケジュールに組み込むことに忠実でありたい。

a. 週末の旅行である必要はないし、一日がかりの大掛かりな行事である必要もない。

b. 一日の始まりである朝の20分間でもよい。一日の終わり、寝る前の時間でもよい。子供の昼寝の時間や、学校の時間中、あるいは昼休みでもよい。

c. 私たちには皆、同じ24時間しかない。主と向き合い、主の中で安らぎを見出し、主によってリフレッシュされ、主によって再び満たされるための時間を、必ず確保しなければならない。

D. 彼らは群衆から離れようとしていたが、本文の第2節によると、群衆はイエスに従ったとあり、なぜ彼らがイエスに従ったのかも記されている。

1. 彼らがイエスに従ったのは、自分の人生をイエスに委ね、イエスに希望と信仰を置きたかったからではない。彼らがイエスに従ったのは、イエスが病める人々に施したしるしを見たからである。

2. ヨハネの福音書には記されていないが、イエスはガリラヤ地方一帯で多くの巡回宣教を行っており、その過程で多くの人々を病氣や患いから癒やしていた。

3. 盲人や足の不自由な人、口がきけない人、病に苦しむ人、悪霊に取りつかれた人々が、その病や障害から癒やされる様子は、まさに壮観な光景だった。人々は驚嘆した。もっと見たいと願ったのだ。

4. 人々は、イエスが他にどのようなしるしや奇跡を行うのかと胸を躍らせていた。間違いなく、イエスが、ローマ帝国の支配下や、ローマの統治下で経験してきた抑圧から彼らを救い出すために待ち望んでいた「その方」であることを願っていたのだ。

5. そのため、イエスと弟子たちが群衆から離れようとしても、群衆は彼らを追いかけてきた。もっと見たいと願い、イエスが自分たちが待ち望んでいた方、すなわち来るべきメシア、イスラエルの王国を再建し、彼らの王として統治するダビデの子であるかどうかを確かめたかったのだ。

E. さて、本文を読み進め、次に何が起きたかを見ていこう。

IV. ヨハネによる福音書 6章4～6節；

A. 4節の冒頭で、過越の祭りが近づいていると記されている。ヨハネが過越の祭りを具体的にその名で言及したのは、これで二度目だ。

1. もちろん、イエスが十字架にかけられる前の最期の週にも、ヨハネは再び過越祭について言及することになる。

2. このことから、過越祭が初めて言及される前の宣教活動と、ヨハネが言及する三回目の過越祭以降の宣教活動を含めると、イエスの地上の宣教活動は約3年間にわたっていたことが分かる。

3. 他の福音書では、イエスが神の過越の小羊として全人類のために命を捧げた、その一つの過越祭についてのみ具体的に言及している。ここでヨハネが述べている詳細がなければ、イエスの地上の宣教活動ははるかに短かったと結論づけがちだろう。

4. しかし、ヨハネがこうした細かな記述を残してくれたおかげで、私たちはイエスの生涯と宣教活動、そしてそれが3年間にわたる出来事を網羅していたという全体像をよりよく把握することができる。

B. さて、5節によると、イエスと弟子たちが山腹で共に座っていたとき、イエスは目を上げて、大勢の群衆が自分に向かってやって来るのを見た。主と二人きりで過ごした時間はそれほど長くは続かなかったが、弟子たち一人ひとりがどう反応したかは、非常に示唆に富んでいる。

1. ここでも、イエスと弟子たちが、彼らを追いかけてきてこの人里離れた場所で彼らを見つけた群衆にどう対応したかを知るためには、他の記述に目を向ける必要がある。

2. マルコの福音書によれば、イエスは群衆を見て、「彼らは羊飼いのいない羊のようであったので、憐れみに動かされた」と記されている（マルコ6:34）。

a. イエスは彼らを世話し、奉仕したいと願われた。イエスは、迷い、無力であり、導きも、糧も、保護も持たない人々に奉仕するために、弟子たちと会いたいというご自身の願いを脇に置かれたのだ。

b. 人々はそうした必要を満たしてくれる誰かを必要としており、イエスにはそうする心があった。イエスはまさに羊飼いの心を体現していた。羊飼いは、自分のことよりも羊の必要を優先するのだ。

c. そしてイエスは、この地上の宣教活動を通じて、私たちにこれを繰り返し示された。最終的には、私たちのためにご自身の命を捧げられた。十字架上で死なれ、私たちの最大の必要、すなわち罪の赦しを満たしてくださったのだ。

d. これこそがキリストの心であり、それは主が私たちにも望んでおられることでもある。

e. **フィリピの信徒への手紙2章3～5節**にはこう記されている。「何事も、利己的な野心や虚栄心によって行わず、謙遜な心をもって、互いに他者を自分よりも優れた者と見なすべきだ。各自が自分の利益だけでなく、他者の利益にも目を向けるべきだ。キリスト・イエスにもあったその心を、あなたがたの中にも持ちなさい」。

f. キリストの弟子として、私たちは他者を自分よりも尊ぶ心を持つべきだ。自分の利益だけを求めるのではなく、他者の必要や利益に対して配慮と思いやりを持つべきである。イエスは、私たちが彼の模範に従い、自己を捨てて無私の心で他者に仕えることを望んでおられる。

3. さて、他の福音書によると、イエスは人々に教えを説き、病人を癒やし、それがかなりの時間続いたため、日がかなり遅くなってきたことがわかる。
4. そして、その時にこそ、弟子たちの心や、彼らが群衆をどのように見ていたかが明らかになるのだ。
- a. 弟子たちはイエスのところに来て、もう日が暮れかけていること、そして「群衆自身の必要のため」に、イエスが彼らを解散させて、何か食べ物を手に入れ、宿を見つけることができるようにすべきだと伝えた。そこは人里離れた場所だったからだ。
- b. ルカによる福音書9章には、弟子たちが群衆についてどう考えていたかが記されている。「日が暮れ始めた頃、十二人がやって来て、[イエス]に言った。『群衆を解散させてください。そうすれば、彼らは周辺の町や村へ行き、宿を取り、食糧を調達できるでしょう。ここは人里離れた場所ですから。』」（ルカ9:12）
- c. イエスは群衆を憐れみの眼差しで見つめ、彼らを羊飼いのいない羊として見なし、その必要を満たしてやりたかった。一方、弟子たちは群衆を見て、もう彼らのことを心配しなくて済むように追いつめたいと思った。彼らにとって群衆は問題であり、助けを必要とする人々の集まりに過ぎなかった。まるで自分たちの活力を吸い取ってしまうような、助けを必要とする人々だったのだ。
- d. 弟子たちは、主と二人きりになり、主と充実した時間を過ごし、宣教や教え、人々の癒やしに出かけていた間に起きた出来事の細部をすべて主にお話してできることを楽しみにしていた。彼ら自身も忙しすぎて食事をする機会さえなかったため、このひとときはまさにそのためのものだったはずだった。
- e. しかし、それはまたしても長い奉仕の一日となってしまった。そして日が暮れかかる頃、弟子たちは群衆を問題として見るようになった。
- f. どの記録にもそうは書かれていないが、私は思うのだ。人々の食事や住処といった物理的な必要を気遣うという名目で人々を帰らせようとした彼らの考えは、実は弟子たちが思いついた単なる言い訳ではなかっただろうか。
- g. 彼らは群衆から離れ、イエスと時間を過ごし、休息を取り、何か食べるためにその場を離れたのだ。どうしてもこう考えてしまう。弟子たちは「おい、腹が減った。この人たちは帰ってもらわないと、俺たちは食えない!」といった感じだったのではないか、と。
- h. 弟子たちは、大勢の群衆に少し苛立ち、少し動揺し、おそらくは不快感を覚えていたのだろう。よく考えてみてほしい。彼らは疲れていて、お腹も空いているのだ。
- i. 疲れてお腹が空いている時に、食事や休息を妨げられると、人をどう扱うだろうか。たいていは、あまり良くはないだろう。
- j. 疲れと空腹は相性の悪い組み合わせだ。皆さんはどうかわからないが、私が疲れてお腹を空かせている時は、大抵、相手にとってあまり良い相手とは言えない。
5. こうして、群衆に対する二人の態度の違いが見て取れる。イエスは憐れみに動かされ、彼らの必要を満たそうとした。一方、弟子たちは

動揺し、疲れ、空腹で、彼らを単に自分たちの望みを阻む、助けを必要とする人々としてしか見ていなかった。なんと鮮明な対照だろう。

- C. 弟子たちが群衆を帰らせようという案を聞いた後、イエスは本文の5節でフィリポに近づき、「この人たちに食べさせるために、どこでパンを買えばよいのか」と尋ねた。

- なぜ主は、他の多くの弟子たちの中で、あえてフィリポにその質問をされたのだろうか。フィリポがその辺りの出身だったからではないかと指摘する人もいる。ルカの福音書によれば、彼らが向かった人里離れた場所はベツサイダの町に属していた。（ルカ9:10b）
- また、ヨハネの福音書によれば、フィリポはベツサイダ出身だった。しかし興味深いのは、ペテロとアンデレも同じ町出身だったということだ。なぜペテロやアンデレに尋ねなかったのだろうか。あるいは、三人全員に尋ねなかったのはなぜだろうか。三人いれば、その周辺でパンが買える場所を知っていたはずだと私は思う。（ヨハネ1:44）
- それなのに、イエスはただフィリポに尋ねた。「この人たちに食べさせるパンを、どこで買えばよいだろうか」。しかし、6節によると、イエスはすでに自分がどうするかを分かっていたにもかかわらず、フィリポがどう応答するかを見るための試練として、この言葉をフィリポに語ったのだ。
- つまり、イエスはフィリポを試そうとしていたのだ。その状況に彼がどう対応するかを見たかった。弟子たちが持ち込んだ、人々の食糧不足という問題に対して、フィリポがどのような解決策を提示するかを見極めたかったのだ。
- イエスは私たちの生活においても、同じことをなさる。私たちの信仰を試すために、ある状況に私たちを置かれ、特定の状況で私たちがどう対応するかを見極めようとするのだ。私たちがイエスとイエスの備えに頼るのか、それとも自分自身と自分の力に頼ろうとするのかを見極めるためである。
- 主は、私たちを試すため、また私たちがどのように対応するかを見るために、困難や障害に直面させる。私たちはどこへ向かうのか。何をするのか。一見不可能な状況に直面したとき、誰に目を向けるのか。

- D. さて、7節でフィリポがどのように応じたかを読んでみよう。

V. ヨハネによる福音書6章7節；

- A. イエスが「どこでパンを買うか」と尋ねたのに対し、フィリポはすぐに「どうやってパンを買うか」という問題に飛びついた。

- たとえフィリポが、それほど多くのパンを手に入れられる場所を一つや二つ知っていたとしても（それは極めてあり得ないことだが）、フィリポの即座の反応は、そもそもそんなことをする資金がどこにあるのかという疑問を投げかけることだった。
- 彼は言った。「二百デナリ分のパンがあっても、一人ひとりに少しずつ配るには足りないだろう。」
 - さて、200デナリは莫大な金額だった。1デナリは、一般の労働者の約1日分の賃金に相当すると考えられていた。したがって、200デナリは、一般の労働者の約8ヶ月分の賃金にほぼ相当する。
 - これを現代の経済に当てはめてみると、フィリポが何を言おうとしていたのか、もう少しよく理解できるだろう。

i. ZipRecruiterやIndeedといったサイトによると、オンデマンド業務の1日あたりの基本報酬は150ドル程度に相当する。これを200日で掛けると、およそ30,000ドルになる。

C. フィリポは、「3万ドル相当のパンでも、人々をほんの少しでも養うには足りないだろう」と言っていたのだ。

3. これは、文字通りにも比喩的にも、膨大な量の「パン」だ。

B. フィリップの解決策は、この状況にお金を投じることだった。彼はすぐに、十分な資金さえあれば問題は解決できると考えたのだ。

1. 多くの人がそのような考え方を持っている。十分な金さえあれば、すべての問題が消え去ると考えているのだ。十分な金を注ぎ込めば、あらゆる問題や障害は解決できると信じている。
2. しかし、イエスが考えていたのはそれではなかった。イエスは、フィリポに単に金で問題を解決できるか試させてみたわけではない。イエスはフィリポに教訓を授けたかったのだ。不可能な課題や状況であっても、イエスを信頼できるということをフィリポに学ばせたかったのだ。
3. なぜなら、フィリポが直面していたのはまさにそのような状況だったからだ。当然のことながら、フィリポも、他の弟子たち全員を合わせても、そんな大金を手元を持っているわけではなかった。彼らには到底払えるような額ではなかったのだ。さらに、8ヶ月分の給料に相当するパンを買えるような場所が、近くにはおそらく一つもなかっただろう。
4. イエスがフィリポに求めたことは、彼にとって不可能なことだった。彼の手持ちの資源は不十分だった。そして、それがまさにイエスがフィリポに伝えようとしていた点だと私は信じている。
5. イエスの願いは、フィリポや他の弟子たちを、イエスへの完全な委ねと依存の境地へと導くことだった。彼ら自身だけでは、その任務を果たすには不十分であることを悟らせるためだ。
6. イエスが彼らに求めたことは、彼らにとっては不可能だったが、イエスにとってはそうではなかった。イエスは不可能を可能にできた。それがイエスの得意分野だったのだ。その後、イエスは弟子たちに、人間にとっては不可能なことも、神にとっては可能であるという極めて重要な真理を語る。「神には、すべてのことが可能だからである。」（**マタイ19:26b**）
7. 主は不可能なことを成し遂げることができる。私たちが不可能だと考えることも、主にとっては何でもないのだ。
 - a. フィリポの信徒への手紙4章は、私たちを励まし、パウロが発見した真理を思い出させてくれる。パウロはこう記している。「私を強くしてくださるキリストによって、私はすべてのことを成し遂げることができる。」（**フィリポ4:13**）
 - b. 私たち自身だけでは不十分だが、キリストと共にあるなら、すべてができる。キリストが私たちの中で、また私たちを通して働いてくださるからこそ、不可能なことも可能になるのだ。

C. 本文を読み進め、次に何が起こったのか見てみよう。8節と9節を読んでみよう。

VI. ヨハネによる福音書 6:8-9;

A. マルコの福音書によると、フィリポがイエスに「ないもの」について告げると、イエスは彼や他の者たちに、行って「あるもの」がどれほどあるか確かめてくるよう命じた。（**マルコ6:38a**）

1. イエスは、彼らが持っていないものには関心がなく、持っているものが何であるかを知りたかったのだ。
- B. そして、この箇所によると、アンデレはある少年——小さな男の子——を見つけ、その子が大麦のパン五つと小さな魚二匹を持っていた。アンデレは「これほど大勢の人々の中で、これだけでは何になるだろうか」と述べた。
 1. 大麦のパンは、通常、家畜の餌として使われていたものだ。それは非常に安価で、手頃な穀物だった。
 - a. 家畜の餌として使われていたが、貧しい人々は小麦の代わりにこれを使ってパンを作っていた。
 - b. この少年が大麦のパンを持っていたという事実は、彼が恐らく非常に貧しかったことを示している。
 2. つまり、彼らが持っていたのは大麦のパン5つと魚2匹だけであり、アンドレアの考えは「これほど大勢の人々の中で、これだけでは何になるだろうか」というものだった。
 3. しかし、イエスは彼らが持っていないものには関心を示さなかった。イエスは、彼らが何を持っているかを知りたかったのだ。
 4. これが神の働き方だ。神は、私たちが持っていないものにはそれほど関心を示さない。神は、私たちが何を持っているか、そして持っているものをすべて神に捧げる意志があるかどうかを知りたがっているのだ。
 5. その少年は、あまり何も持っていなかった。彼は貧しかった。しかし、彼が持っていたものを弟子たちに渡し、弟子たちはそれをイエスに差し出したのだ。
 6. もし私たちが持っているすべてを神に捧げれば、神はそれを使って働いてくださる。
 - a. 主はそれ以上を求めないが、それ以下も受け入れない。
 - b. 主は私たち全員を求めている。私たち全員を要求しているのだ。あなたが持っているものがどれほど少なくても、あるいは多くても構わない。私たちがすべてを主に捧げる意志さえあれば、主はそれを受け取り、それを使って働いてくださる。
 7. 私たちはよく、イエスに捧げるものなど何もないと思ってしまう。持っているものを見るのではなく、持っていないものばかりに目を向けてしまうのだ。
 - a. 「歌えない。教えられない。人の前で話すこともできない。できない、できない、できない。」イエスはそんなことは気にしていない。あなたには何があるか、そしてそれをすべて主に捧げる覚悟はあるか。
 - b. 主はそれを使ってくださる。主は私たちが持っているものを使い、それを使って信じられないようなことを成し遂げてくださるのだ。この物語の残りの部分で見るように、それは私たちが想像したり考えたりできる以上のことなのだ。
- C. 10節と11節と一緒に見ていこう。彼らが持っていたわずかなもので、イエスが何をするのかわかる。

VII. ヨハネによる福音書6章10～11節；

A. イエスは弟子たちに、人々にその場にある草の上に座るように命じた。

1. マルコの福音書によれば、イエスは人々を百人ずつ、五十人ずつ座らせた（**マルコ6:40**）。また、ヨハネの福音書によると、男性の数は約5,000人であったが、マタイの福音書によれば、この数には女性や子供は含まれていない（**マタイ14:21**）。

- a. したがって、女性や子供を含めれば、おそらく1万人ほどの人数になるだろう。それは、養うべき口が非常に多いということだ。

- B. イエスはパンを受け取り、感謝をささげてから、弟子たちに配り始め、弟子たちはそれを群衆に配った。

1. イエスは、彼らが持っていたわずかなものを取り、それについて父に感謝をささげ、それを使って働き始めた。奇跡は主の手の中で起こった。イエスがパンを一つずつちぎるたびに、さらに多くのパンが現れた。ちぎるたびに、何度も何度も、ますます多くのパンが供給されたのだ。
2. そして、ここでもう一つ重要な点に気づいてほしい。奇跡を行われたのはイエスご自身であり、イエスが「製造者」であり「生産者」だった。弟子たちに求められたのは、それを配ることだけだった。
 - a. 私たちは「作り手」になるよう召されているわけではない。生産者になるよう召されているわけでもない。私たちがすべきことは、神が与えてくださるものを配ることだけだ。
 - b. 何かを創造する必要はない。自分たちで物を作り出す必要もない。自分たちだけで何かを思いつく必要もない。イエスは、私たちに奇跡を起こすことを期待しているわけではない。
 - c. ただ、主が与えてくださるものを配るだけでよい。それが主の私たちに対する思いだ。私たちが持っているすべてを主に捧げ、主がそのもので働かれるようにし、そして主が私たちに返してくださるものを、忠実に他の人々に配ることだ。
3. 弟子たちは、出かけるたびに、より多くのパンと魚を携えて戻ってきた。おそらく、一人あたり1,000食近くを配ったのだろう。
 - a. 彼らは毎回、両手いっぱいのパンや魚を持って出かけていき、主のもとに戻ると、主は彼らに配るためのさらなる分を用意してくださっていた。
 - b. 11節には、人々は好きなだけ食べたとある。これは、私たちが日曜学校で子供たちに配るようなちょっとしたおやつなどではなかった。一人ひとりが好きなだけ食べたのだ。これはbuffetであり、食べ放題の、パンと魚の饗宴だった。そして、それはきっと、この人たちが今まで食べた中で最も美味しいパンと魚だったに違いない。

- C. この学びを締めくくるにあたり、12節と13節を見てみよう。イエスはごちそうの後に、弟子たちを少し片付けの作業に送り出している。

VIII. ヨハネによる福音書6章12～13節；

- A. 弟子たちは、今まさに起きた出来事に驚き、圧倒されていたに違いない。彼らは何度も往復して、主が祝福し与えてくださったものを配っていたが、イエスが彼らに教え、示したいことはまだあったのだ。

1. 人々が皆満腹になり、誰もが望むだけ食べた後——イエスも満たされ、弟子たちも満たされ、群衆も満たされた——その後、イエスは弟子たちを送り出し、

残ったパンの切れ端を集めさせ、何も無駄にしないようにした。イエスは何も無駄にしたくなかったのだ。

2. そして、この信じがたい奇跡を通じて、弟子たちにさらに少しばかり教える授ける機会を、イエスは決して無駄にしたくなかったのだ。
- B. そこで、お腹も心も満たされた弟子たちは外へ出て、残骸——いわば残り物——を集めた。その結果、大麦のパンで12の籠がいっぱいになった。10個ほどでも、11個でも、パン屋のダースでもなかった。彼らはまさに12の籠をいっぱい集めたのだ。
1. 弟子たちは何人いたか。12人だ。つまり、12人の弟子一人ひとりが、自分たちが主に捧げ、主が祝福して御手で裂かれたもので満たされたかごを一つずつ持つのに十分な残りがあったということだ。
 2. 私が敬愛する聖書解説者、ウォーレン・ウィアーズビーはこう述べている。「私たちが持っているものをキリストに捧げるとき、決して損をすることはない。結局、捧げる前よりも多くの祝福を受け取ることになるのだ。」
 - a. その祝福は状況によって異なる形をとるかもしれない。しかし、私たちが持っているすべてを神に捧げる決意をし、神が私たちに返してくださるものを忠実に分かち合うとき、神は必ず祝福してくださるのだ。
 - b. 私は長年の奉仕活動を通じて、このことを何度も目にしてきた。時折、奉仕がどれほど困難で過酷なものであっても、祝福は常に犠牲を上回る。神は常に備えてくださるのだ。
 - c. 神に勝って与えることはできない。神は誰に対しても借りを負うことはない。私たちがわずかなものであっても忠実に捧げるとき、神は忠実に備え、私たちを顧みてくださる。私たちが神に忠実に仕え、神から与えられたものを他者に分かち合うとき、神は私たちの必要を満たし、それ以上の恵みを与えてくださるのだ。
 - d. 私たちが主に捧げ、主が返してくださったものを忠実に分かち合う意志があるとき、何も無駄にはならない。心が正しい場所にあり、単に自分たちが持っているものを捧げ、主が返してくださったものを他者に分かち合うことを心から願っている限り、主のために行くことは決して無駄にはならない。神は備えてくださる。他者の世話を忠実に行う者たちを、神は守ってくださるのだ。
 3. 弟子たちは、自分たちが持っているものでは足りないと思っていた。「パンが五つと魚が二匹あるが、これほど大勢の人々にとって、これでは何になるだろうか」と彼らは考えた。
 - a. しかし、彼らが持っていたものは、神が働きかけるには十分すぎるほどだった。神は、彼らが想像しうる以上のことを成し遂げることができたのだ。
 - b. エペソ人への手紙3章20節は、私たちの主を「私たちの願いや思いを超えるほど、はるかに豊かに成し遂げてくださる方」と述べている（**エペソ3:20**）。
 - c. 神は私たちが持っているものを受け取り、私たちが求めることや考えることをはるかに超えて豊かに成し遂げてくださる。そして、私たちが神に捧げるものを決して無駄にはしない。神は真実な方だ。私たちが信仰によって、わずかながらも持っているものを神に捧げるとき、神は働いてくださり、必要なものを与えてくださる。
 - d. アーメン？　アーメン。祈ろう。